

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04423

研究課題名(和文) 心理アセスメントにおけるDSM診断の妥当性と有用性に関する実証的研究

研究課題名(英文) The validity and utility of the DSM diagnosis for psychological assessment: an empirical study

研究代表者

黒木 俊秀 (KUROKI, Toshihide)

九州大学・人間環境学研究院・教授

研究者番号：60215093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：心理アセスメントにおけるパーソナリティ障害のDSM-5代替モデルの妥当性と有用性を明らかにするために、以下の調査を行った。(1) DSM-5パーソナリティ調査票(PID-5)日本語版を開発し、その信頼性及び妥当性を確認した。(2) NEO-PI-Rの所見に基づくパーソナリティ特性の描写のフィードバックは、臨床的有用性が高いことが示唆された。(3) 精神科入院患者のケース・フォーミュレーションの実践とその効果を検討した。以上の結果から、心理アセスメントにおいて少なくともパーソナリティ障害診断のディメンションのモデルは、妥当性、信頼性ととも臨床的有用性も担保する可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

DSM-5パーソナリティ調査票(PID-5)日本語版の開発により、わが国のパーソナリティ障害の臨床心理学研究において新しい方向論を示した意義は大きい。また、精神疾患診断のカテゴリー的モデル(分類的評価)とディメンション的モデル(数量的評価)のそれぞれの臨床的有用性とその限界について明らかにしたことにより、心理専門職のアセスメント技術のみならず、広くメンタルヘルス分野の専門職の臨床技能の向上に貢献し、よってわが国のメンタルヘルスの改善に寄与することが期待されることから、その意味での社会的意義も大きい。

研究成果の概要(英文)：To elucidate the validity and clinical utility of the DSM-5 alternative model of personality disorders in psychological assessment, the following surveys were performed. (1) We developed a Japanese version of the Personality Inventory of the DSM-5 (PID-5-J) and confirmed its reliability and validity, recommending its wide application for clinical assessment of personality disorders. (2) Caregivers working for demented elderly in the hospitals and care homes appreciated the reports on each individual's personality traits based on the NEO-PI-R survey, suggesting the clinical utility in sharing of the personality trait assessment. (3) We attempted a case formulation that complements the DSM diagnosis for psychiatric patients who were hospitalized in an emergency ward of the psychiatric hospital. These results suggest that the dimensional model of the psychiatric diagnosis, at least in part, of personality disorders may ensure clinical utility as well as validity and reliability.

研究分野：臨床心理学

キーワード：DSM カテゴリー ディメンション パーソナリティ障害 心理アセスメント PID-5 臨床的有用性 ケース・フォーミュレーション

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

アメリカ精神医学会 (APA) の DSM は、その第 3 版 (DSM-III; APA, 1980) 以来、世界保健機関 (WHO) の ICD とともに、精神疾患診断のグローバル・スタンダードとしての地位を確立し、心理アセスメントにおいても共通言語として広く普及している。しかし、近年、DSM-III 以降の精神疾患のカテゴリー的定義は科学的妥当性を欠くものとして批判されるようになり、DSM-5 (APA, 2013) の開発段階より精神疾患診断のディメンシヨンのモデルへの転換が提唱されるようになった (APA, 2002)。一方、臨床家の立場からは、ディメンシヨンのモデルは臨床的有用性を欠くという批判がある。心理アセスメントにおいても、DSM 診断の妥当性を自明のものとしてせず、臨床的有用性の観点からも批判的に検証するという姿勢が求められる。

とくにパーソナリティ障害の診断については、パーソナリティ特性の 5 因子モデルに基づくディメンシヨンの評価と従来のカテゴリー的分類を併せた「パーソナリティ障害の代替 DSM-5 モデル」が推奨されており (APA, 2013)、パーソナリティ障害のディメンシヨンのモデルの妥当性と臨床的有用性について事例を対象とした実証的研究や DSM-IV のパーソナリティ障害の診断基準 (カテゴリー的モデル) との整合性に関する研究が必要である。

一方、従来、我が国の心理専門職の精神疾患診断に対する関心は低く、心理アセスメントにおいても DSM や ICD のような標準的診断の妥当性や臨床的有用性の問題が斟酌されることはなかった。しかしながら、公認心理師の時代を迎え、とくに医療領域において他職種との連携が求められるようになると、心理アセスメントにおいて診断にかかる機能やパーソナリティ特性の評価が重要になると考えられる。そこで、本研究は、心理アセスメントにおける精神疾患のディメンシヨンのモデルの臨床的有用性と限界について明らかにし、心理専門職の心理アセスメント技術の向上に寄与することを最終目標としている。

2. 研究の目的

- (1) 心理アセスメントにおけるパーソナリティ障害の DSM-5 代替モデルの妥当性と有用性を明らかにするために、DSM-5 パーソナリティ調査票 (PID-5; APA, 2013) 日本語版 (短縮版を含む) を開発し、その信頼性及び妥当性を検証する。
- (2) 医療福祉専門職におけるディメンシヨンのモデル (NEO-PI-R) に基づくアセスメント・データの有用性と限界を明らかにする。
- (3) 多職種チームによる症例のアセスメントのために、ケース・フォーミュレーションを試み、その有用性と限界を検証する。

3. 研究の方法

- (1) DSM-5 パーソナリティ調査票 (PID-5) 日本語版の開発、その信頼性及び妥当性に関する調査

DSM-5 パーソナリティ調査票 (Personality Inventory for DSM-5: PID-5) は、DSM-5 代替モデルの病的パーソナリティ特性 (5 因子モデルに対応する 5 つのドメインと 25 のファセットにより構成) を評価するもので、成人版は 4 件法、220 項目 (短縮版は 25 項目) より構成され、アメリカ精神医学会より無償で提供されている (APA, 2013)。PDI-5 の日本語翻訳を完了した後、まず PID-5 日本語版短縮版の信頼性及び妥当性に関する予備的検討を行った後に、PID-5 日本語版を用いた WEB 調査を行った。

PID-5 日本語版 (短縮版) の信頼性及び妥当性に関する予備的検討

254 名の大学生を対象に PID-5 短縮版 (25 項目)、パーソナリティ 5 因子モデルに基づく NEO Five Factor Inventory (NEO-FFI; 60 項目)、及び DSM-5 パーソナリティ障害のための構造化面接 (SCID-5-PD) の人格質問票より抜粋した 61 項目を実施し、確認的因子分析による因子妥当性、再検査信頼性、及び基準関連妥当性等を検討した。

PID-5 日本語版の信頼性及び妥当性に関する WEB 調査

PID-5 日本語版 (長尺版; 220 項目) の信頼性及び妥当性を検証するために、約 1,000 名の一般人口集団を対象とした WEB 調査を行なった。短縮版の検討と同様に、基準関連妥当性を検討するために、同時にパーソナリティ 5 因子モデルに基づく NEO-FFI、及び DSM-5 軸パーソナリティ障害のための構造化面接のパーソナリティ質問票 (SCID-II-PD; 反社会性パーソナリティ障害の項目を除外した 59 項目) も実施した。

PID-5 の 5 ドメインおよび 25 フォセットについて確認的因子分析を行い、因子妥当性を検討した。また、Cronbach の係数の算出及び再検査との相関係数を算出し、信頼性を検討した。さらに、NEO-FFI と SCID-II-PD との相関係数を算出し、基準関連妥当性の検討を行った。

- (2) NEO-PI-R によるパーソナリティのアセスメント・データに対する回答者の反応とその有用性に関する調査

複数の施設に勤務する医療福祉領域の専門職 (主として認知症の介護従事者) 149 名を対象にパーソナリティ 5 因子モデルにも続く Revised NEO Personality Inventory (NEO-PI-R; 240 項目) を実施し、その結果に基づき、個々の回答者の所見を記載した。所

見の記載は、パーソナリティの上位・下次元ともに、各指標の高低に注目して、NEO-PI-R 使用マニュアル(下仲他, 2011)に基づき定式化した。次に各回答者に NEO-PI-R の所見を郵送にてフィードバックし、その際、「結果はどのくらい当てはまっていたと思われますか?」「所見は今後役に立ちそうだと思いますか?」「所見は職場のストレス対策に役立つように思いますか?」等の質問を行い、4 件法及び自由記述にて回答を求めた。

(3) 精神科医療におけるケース・フォーミュレーションに関する予備的検討

国立病院機構肥前精神医療センターにおいて、急性期病棟に入院する患者について DSM 診断を補完するケース・フォーミュレーションを診療記録に記載する試みを開始した。参加者は、精神科専攻医 10 名余であり、研究分担者の本村が指導した。DSM-5 マニュアル (APA, 2013) の指針に基づき、詳細な臨床病歴と、その精神疾患の発症に寄与した可能性のある社会的、心理的、生物学的な要因に関する簡潔な要約が含まれるように留意した。定期的なケース・カンファレンスの際にケース・フォーミュレーションの報告を行い、その有用性について参加者の感想を自由記述にて求めた。

4. 研究成果

(1) DSM-5 パーソナリティ調査票 (PID-5) 日本語版の開発、その信頼性及び妥当性に関する調査

PID-5 日本語版 (短縮版) の信頼性及び妥当性に関する予備的検討

因子妥当性を検証するために、254 名の大学生より得られたデータについて確認的因子分析を行なったところ、5 因子モデルの適合度は低く、内的整合性は十分とはいえず、因子の一貫性に欠けていた (Table 1)。「精神病性」因子を除いた 4 因子モデルについても確認的因子分析を行った結果、モデルの適合度がやや上昇し、因子妥当性が改善された。このことは、「精神病性」因子が他の 4 因子から派生している影響を示唆している。しかしながら、適合度の差は微量であり、他の解析結果と併せて本来の 5 因子モデルと扱うことが適切と考えられた。

Table 1 日本版 PID-5 短縮版 (5 因子モデル) の確認的因子分析の結果

項目	F1	F2	F3	F4	F5
F1:否定的感情 ($\alpha = .671$)					
15. あらゆることで容易にイライラする。	.764				
9. よく本当に些細な理由で容易に感情的になる。	.675				
8. ほとんど全てのことを不安に思う。	.635				
11. それが明らかにならなくとも 1 つの方法に固執する。	.373				
10. 人生において一人になることが他のどんなことよりも怖い。	.334				
F2:離脱 ($\alpha = .618$)					
14. 友人を作ることに関心がない。		.788			
16. 人ととても親しくなることが好きではない。		.761			
13. 恋愛関係を選ばない。		.569			
4. しばしば本当に何かをしているということがないように感じる。		.230			
18. 何かに夢中になることは稀である。		.132			
F3:対立 ($\alpha = .491$)					
22. 自分の欲しいものを得るために人を使う。			.613		
25. 他人を騙すことは私にとって簡単なことである。			.472		
20. しばしば、自分より大切ではない人と交流しなければならない。			.407		
17. もし自分が他人の気分を害したとしても、それは大したことではない。			.370		
19. 人の注目をひきたがる。			.255		
F4:脱抑制 ($\alpha = .662$)					
3. どんなに頑張っても軽率な判断を止めることができない。				.734	
2. ほとんど衝動的に行動すると思う。				.543	
1. 人は私を回こつ見すたと言っだらう。				.521	
5. 他人は私を無責任な人と見なす。				.517	
6. 先の計画を立てるのが得意ではない。				.346	
F5:精神病性 ($\alpha = .690$)					
24. 自分の身の回りの物が、よく非現実的に感じられたり、あるいは妙にありありとリアルに感じられたりする。					.679
21. 自分では理解出来るが他人からは奇妙だと言われる考えをよく思いつく。					.595
12. あるはずのないものを見ることがある。					.584
7. 私の考えはしばしば他の人に理解されない。					.561
23. よくぼんやりする。そして突然気がつき、多くの時間が過ぎたことに気づく。					.407

再検査信頼性は、「対立」因子以外の 4 因子には 2 回の調査間に強い正の相関が認められたことから、概ね十分であり、一定の信頼性を有していることが示唆された。

さらに、「精神病性」を除外した PID-5 の 4 因子と NEO-FFI の因子、及び PID-5 と SCID-5-PD の各因子の間に相関が認められ、基準関連妥当性が示唆された。PID-5 の 5 因子のうち、「否定的感情」因子は、すべてのパーソナリティ障害に関する傾向との関連が認められたことから、対応する NEO-FFI の「ニューロチシズム」と同様に、うつ病や不安症など、様々な精神疾患の発症リスクとなる可能性が示唆された。

一方、「精神病性」因子は、他の PID-5 の因子と異なり、NEO-FFI の「開放性」とは弱い正の相関しか見られなかったが、PID-5 の他の因子よりも SCID-5-PD の統合失調型パーソナリティ障害と強く相関していた。このことは、DSM-5 代替モデルにおける「精神病性」と統合失調症パーソナリティ障害の対応関係を支持している。

PID-5 日本語版の信頼性及び妥当性に関する WEB 調査

WEB 調査の対象者は、948 名 (男: 479 名、女: 469 名) の一般人口集団であり、年齢は 18~65 歳まで広くほぼ均等に分布していた。その地域分布も、人口分布に従って全国に分布しており、わが国の一般人口の代表的集団と言えた。

PID-5 の各フォセットの一次元構造を確認するために、確認的因子分析を行った。その結果、概ね良好な適合度が得られた。続いて、各フォセットの記述統計及び Cronbach の係数を算出した。係数は概ね良好であったが、「服従性 (Submissiveness)」と「疑い深

さ(Suspiciousness)」は低くなった。以上のように、フォセットに関する因子妥当性は概ね十分といえるが、内的整合性が一部低かった。

次に、ドメインの因子妥当性を確認するために確認的因子分析を行った。さらに、各ドメインの記述統計、及び Cronbach の係数を算出した結果、十分とは言えないものの、一定の因子妥当性、及び内的整合性を認めた。

また、基準関連妥当性を検証するために、PID-5 と NEO-FFI、または SCID-₅-PD との相関分析を行った。PID-5 のドメインと対応が想定されている NEO-FFI の項目間には中程度の有意な相関がみられた。一方、対応が想定されていない項目においても有意な相関がみられ、必ずしも両尺度の項目間の相関は必ずしも所属する 5 ドメインとパーソナリティ特性 5 因子との関係に従うわけではないと考えられた。SCID-₅-PD とは、広い範囲で中程度～強度の相関関係が認められ、PID-5 の不適応的パーソナリティ特性は、パーソナリティ障害を捉えうると示唆された。

さらに、再検査信頼性の検討のために、2 週間の間隔を置いて実施した 2 回の調査における PID-5 の得点について相関分析を行い、ほとんどの因子において、係数が .70 前後の有意の相関を示し、一定した安定性が示唆された。

以上の結果から、本研究において開発した PID-5 日本語版には、比較的高い妥当性と信頼性が確認された。その短縮版とともに、今後、パーソナリティ障害のアセスメントに広く適用することが期待される。

(2) NEO-PI-R によるパーソナリティのアセスメント・データに対する回答者の反応とその有用性に関する調査

5 つの施設の介護従事者 149 名に対して、各個人の NEO-PI-R の所見に基づくパーソナリティ特性の描写をフィードバックし、その反応を検討した。その結果、ほとんどの対象者が 4 件法評価において「当たっている」と回答していた。また、自由記述の回答コードと性格特性下位項目との関連を解析したところ、因果関係ははっきりしないものの、特定のパーソナリティ特性下位項目が回答の内容と関連している可能性が示唆された。

さらに、「当たっている」や「意外だった」という回答とともに、所見が「役に立ちそう」や「職場のストレス対策に役立つ」という回答も多かったことから、パーソナリティ特性のアセスメント所見のフィードバックは、臨床的有用性が高いことが示唆された。

(3) 精神科医療におけるケース・フォーミュレーションに関する予備的検討

肥前精神医療センターにおいて、急性期病棟に入院する患者について DSM 診断を補完するケース・フォーミュレーションの実践とその効果を調査した結果、比較的簡易な様式のフォーミュレーションであっても核心部分となる病因論的説明の記述はかなり難しいことが明らかになった。また、病因論的理解の記述について、医師と心理職では相違があり、前者は生物学的な説明に偏る傾向があるのに対して、後者は心理学的な理解を好む傾向があることが認められたが、いずれも臨床現場における多職種間のコミュニケーションにおいて有用性があると考えられた。最も重要な臨床的有用性が、予後と治療反応性の予測である点は、職種にかかわらず、共有されていた。

(4) 成果のまとめ

心理アセスメントにおけるパーソナリティ障害の DSM-5 代替モデルの妥当性と有用性を明らかにするために、DSM-5 パーソナリティ調査票 (PID-5) 日本語版 (短縮版を含む) を開発し、わが国の一般人口集団を対象とした WEB 調査を行い、その信頼性及び妥当性を確認した。

医療福祉施設の介護従事者に対して、各個人の NEO-PI-R の所見に基づくパーソナリティ特性の描写をフィードバックし、その反応を検討したところ、パーソナリティ特性のアセスメント所見の共有は、臨床的有用性が高いことが示唆された。

精神科病棟に入院する患者について DSM 診断を補完するケース・フォーミュレーションの実践とその効果を調査した結果、比較的簡易な様式のフォーミュレーションであっても核心部分となる病因論的説明の記述はかなり難しいことが明らかになった。また、その記述内容について、職種間で差異があった。

以上の結果から、心理アセスメントにおいて少なくともパーソナリティ障害診断のディメンション的モデルは、妥当性、信頼性ととも臨床的有用性も担保する可能性が示唆された。しかしながら、病因論的説明に寄与するにはなお限界があり、今後、検討の余地を残している。

< 参考文献 >

- American Psychiatric Association (2013). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 5th Revision, (DSM-5). Washington, D.C.: American psychiatric Association. (高橋三郎・大野 裕 (監訳)(2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル, 医学書院).
- Krueger, R. F., Derringer, J., Markon, K. E., Watson, D., & Skodol, A. E. (2012).

Initial construction of a maladaptive personality trait model and inventory for DSM-5. *Psychological Medicine*, 42, 1879-1890.

Kupfer, D.J., First, M.B., & Regier, D.A. (Eds) (2002). *A Research Agenda for DSM-V*. American Psychiatric Association, 2002 (黒木俊秀・松尾信一郎・中井久夫(訳)(2008). *DSM-V 研究行動計画*, みすず書房).

下仲 順子・中里 克治・権藤 恭之・高山 緑(2011). *日本版 NEO-PI-R/NEO-FFI 共通マニュアル改訂増補版*, 東京心理.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 黒木俊秀	4. 巻 13
2. 論文標題 双極と単極の「間」は存在するか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神科診断学	6. 最初と最後の頁 127-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木俊秀	4. 巻 49
2. 論文標題 わが国の精神医学の来し方行く未を思う 平成から令和へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 145-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木俊秀, 七田千穂	4. 巻 36
2. 論文標題 気分変調症とパーソナリティ - 両者は連続しているのか -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 127-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本村啓介, 黒木俊秀	4. 巻 34
2. 論文標題 カテゴリー対ディメンジョン	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 1115-1122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本村啓介	4. 巻 19
2. 論文標題 不安症群	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 分子精神医学	6. 最初と最後の頁 205-211
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木俊秀	4. 巻 34
2. 論文標題 発達精神病理学の現在	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 663-668
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木俊秀	4. 巻 21
2. 論文標題 精神療法と薬物療法の治療的接点—二元論的対立から一元論的統合へ—	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床精神薬理	6. 最初と最後の頁 591-599
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木俊秀	4. 巻 46
2. 論文標題 DSM時代の終焉と多元主義的言説の台頭	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床評価	6. 最初と最後の頁 513-524
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木俊秀	4. 巻 268
2. 論文標題 変貌する発達障害の概念－最近の臨床トピック.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 医学のあゆみ	6. 最初と最後の頁 208-211
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木俊秀	4. 巻 18
2. 論文標題 関係性問題を評価する DSM-5とICD-11における位置付け.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 587-590
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本村啓介	4. 巻 39
2. 論文標題 精神疾患の概念をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床精神病理	6. 最初と最後の頁 215-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王 百慧, 黒木俊秀	4. 巻 64
2. 論文標題 大学生に見られる日常的解離性体験と心理的特性との関連.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 九州神経精神医学	6. 最初と最後の頁 8-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木俊秀	4. 巻 46
2. 論文標題 持続性抑うつ障害とうつ病の慢性化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 527-532
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木俊秀、本村啓介	4. 巻 17
2. 論文標題 精神疾患診断のパラダイム・シフト - カテゴリーからディメンジョンへ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 290-293
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木俊秀	4. 巻 18
2. 論文標題 DSMにおける発達の視点 - 神経生物学の知見と心理支援をつなぐ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 153-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木俊秀	4. 巻 16
2. 論文標題 Disease mongeringを超えて - 精神疾患の生物学的・心理社会的理解の深化と多面性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 科学技術社会論学会第16回年次研究大会予稿集	6. 最初と最後の頁 163-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 黒木俊秀
2. 発表標題 双極と単極の「間」は存在するか
3. 学会等名 第39回日本精神科診断学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toshihide Kuroki, Ishu Ishiyama
2. 発表標題 Morita therapy and trauma care
3. 学会等名 The 10th International Congress of Morita Therapy（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toshihide Kuroki
2. 発表標題 Obsessive-compulsive disorder: Clinical heterogeneity and innovative treatment approaches - Discussion -
3. 学会等名 The 6th Congress of Asian College of Neuropsychopharmacology（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒木俊秀
2. 発表標題 わが国における公認心理師教育と課題
3. 学会等名 第8回日本精神科医学会学術大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒木俊秀
2. 発表標題 公認心理師教育において「医師の指示」をいかに教えるか
3. 学会等名 第115回日本精神神経学会学術総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒木俊秀
2. 発表標題 精神科臨床における診断と見立て－指定討論－
3. 学会等名 第114回日本精神神経学会学術総会，神戸市
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 黒木俊秀
2. 発表標題 黒木俊秀：「全般不安症」概念の起源と変遷、そしてわが国における受容。
3. 学会等名 第11回日本不安症学会学術総会，岐阜市
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒木俊秀
2. 発表標題 イントロダクション：ASDの神経生物学の最前線－基礎と臨床の架橋－
3. 学会等名 第58回日本児童青年精神医学会総会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 黒木俊秀
2. 発表標題 Disease mongeringを超え：精神疾患の生物学的・心理社会的理解の深化と多面性
3. 学会等名 第 16 回 科学技術社会論学会年次研究大会・総会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 黒木俊秀（分担執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 星和書店	5. 総ページ数 236
3. 書名 発達障害の精神病理 II	

1. 著者名 黒木俊秀（分担執筆）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 医歯薬出版株式会社	5. 総ページ数 240
3. 書名 公認心理師カリキュラム準拠・精神疾患とその治療	

1. 著者名 一般財団法人日本心理研修センター（監修）、黒木俊秀、中嶋義文ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 312
3. 書名 公認心理師現任者講習会テキスト	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	本村 啓介 (Motomura Keisuke) (60432944)	独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター(臨床研究部)・臨床研究部・常勤医師 (87204)	
研究 協力者	堀江 和正 (Horie Kazumasa)	九州大学・人間環境学府・大学院生 (17102)	
研究 協力者	七田 千穂 (Shichita Chiho)	九州大学・人間環境学府・大学院生 (17102)	